Ⅰ　調査の概要

1　調査の経緯

栃木県総合教育センターでは、平成10年度より５年毎に児童生徒の生活状況に関する調査を実施し、本県児童生徒の生活習慣や行動傾向の調査分析を行い、その結果を「提言」等にまとめ、報告してきた。

本年度調査の「栃木の子どもの生活状況調査」は、平成20年度及び平成15年度に実施した調査同じ質問項目により、５年前及び10年前の調査結果と比較をするとともに、近年話題となっている項目を付加することにより、児童生徒の生活習慣や行動傾向を把握しようとするものである。

調査対象は、５年前調査と同様に抽出児童生徒とその保護者として、保護者の児童生徒に対する働きかけや意識等についても調査を行うこととした。

2　調査の目的

本県児童生徒の生活習慣や行動傾向、保護者の児童生徒に対する働きかけや意識等を把握し、本県の子どもの日常生活に関する基礎資料を作成し、学校及び教育研究団体、教育行政機関等への情報提供を行うことにより、本県の「とちぎ教育振興ビジョン（三期計画）」に示された「豊かな心と健やかな体をはぐくむ教育の推進」と「心の教育の推進」に寄与する。

3　調査の方法

(1) 抽出方法

平成20年度及び平成15年度に実施した調査との比較を考慮し、前回の抽出方法を踏襲した。

ア　小・中学校

県内の小・中学校について、学校規模別のグループを設定し、それぞれのグループから偏りがないように無作為に学校を抽出し、その学校の当該学年の１学級を対象とした。

イ　高等学校

県立全日制高等学校について、学区・学科別のグループを設定し、偏りがないようにそれぞれのグループから無作為に抽出し、その学校の当該学年の１学級を対象とした。

(2) 調査対象

平成20年度調査と同様に、調査対象学年を小２・小５・中２・高２とした。調査実施数等の詳細については表１に示した通りである。

表１：調査実施数及び回収率

学　　年	対　象 学校数	実施児童生徒数 回収／配布（回収率）	実施保護者数 回収／配布（回収率）
小 学 校 第２学年	１８	503／503　(100%)	492／ 503　(97.8%)
小 学 校 第５学年		526／526　(100%)	514／ 526　(97.7%)
中 学 校 第２学年	１８	518／518　(100%)	505／ 518　(97.5%)
高等学校 第２学年	１４	533／536 (99.4%)	513／ 536　(96.3%)
計	７０	2080／2083 (99.9%)	2027／2083　(97.3%)

(3) 調査方法

質問紙により回答を求めた。所要時間は１５分から３０分程度とした。

(4) 実施期日

平成２５年９月２４日(火)から１０月４日(金)までのうち、学校が定めた期日。

4　質問の構成

(1) 児童生徒

各学年の質問項目は、表２に示した３つの領域から成っている。各領域の項目数は、小学校第２学年とそれ以外の学年で異なっている。３つの領域は、過去の状況との比較のために、栃木県総合教育センターが平成15年度に実施した調査(以後「H15調査」)の質問が基本となっている。

(2) 保護者

保護者の質問項目は、各対象学年とも表３に示した３つの領域から成っている。いずれの学年の項目も同じである。児童生徒の意識と保護者の意識とを比較するために、保護者の質問項目は、児童生徒への質問内容を保護者の立場から質問する内容が基本となっている。

表２：児童生徒各学年の領域別質問項目数

学　年 領　域	小学校 第２学年	小学校第５学年 中学校第２学年 高等学校第２学年
A　あなたのふだんの生活について	２９	４９
B　勉強のことについて	１１	１３
C　あなた自身のことについて あなたのことについて（小２）	１２	２５

表３：保護者の領域別質問項目数

領　域	すべての保護者
A　お子様のふだんの生活とその指導について	２１
B　お子様の勉強のことについて	１４
C　教育に関する考えや心がけていることについて	２７

5　分析・考察の方法

質問紙調査によって得られた回答を、以下の手法と手順により集計及び分析し、「Ⅲ　調査結果」の「1　集計結果」と「2　統計的分析手法を用いた分析結果」において結果をまとめた。なお、「Ⅱ 調査結果の概要」は、集計及び分析結果の中から指導の参考と考えられるものを精選し、「すべての大人へのメッセージ」としてまとめたものである。

1　集計結果　～本年度の調査結果と５年前及び10年前の結果との比較～

本調査で実施したすべての質問項目の回答結果について、**図１**に示すように上から「質問項目（原文）」、本年度調査結果の集計表（学年、男女別）、平成20年度調査及び平成15年度調査の同一質問項目における経年比較を表したグラフにより報告する。

(2)　あなたは、何時ごろ寝ることが多いですか。(1つ選ぶ)　小2(3)

		1 午後9時前		2 午後9時ごろ		3 午後10時ごろ		4 午後11時ごろ		5 午前0時ごろ		6 午前1時過ぎ		回答者数
小2	男	49	20.1%	117	48.0%	50	20.5%	21	8.6%	5	2.0%	2	0.8%	244
	女	54	21.3%	123	48.4%	61	24.0%	11	4.3%	3	1.2%	2	0.8%	254
	計	103	20.7%	240	48.2%	111	22.3%	32	6.4%	8	1.6%	4	0.8%	498
小5	男	15	5.7%	89	33.6%	126	47.5%	30	11.3%	5	1.9%	0	0.0%	265
	女	5	1.9%	75	28.8%	148	56.9%	28	10.8%	4	1.5%	0	0.0%	260
	計	20	3.8%	164	31.2%	274	52.2%	58	11.0%	9	1.7%	0	0.0%	525
中2	男	0	0.0%	10	4.0%	79	31.2%	101	39.9%	51	20.2%	12	4.7%	253
	女	0	0.0%	12	4.6%	62	23.8%	121	46.4%	54	20.7%	12	4.6%	261
	計	0	0.0%	22	4.3%	141	27.4%	222	43.2%	105	20.4%	24	4.7%	514
高2	男	1	0.3%	3	1.0%	8	2.8%	75	26.1%	150	52.3%	50	17.4%	287
	女	0	0.0%	2	0.8%	18	7.4%	64	26.2%	128	52.5%	32	13.1%	244
	計	1	0.2%	5	0.9%	26	4.9%	139	26.2%	278	52.4%	82	15.4%	531

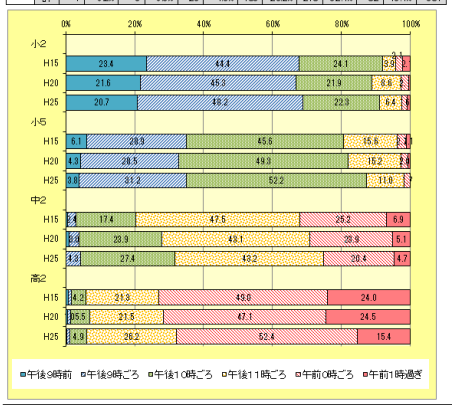


図１：「1　集計結果」より

2　統計的な手法による分析結果

(1)　子どもの生活行動や意識につながる「心を捉える視点」について　～因子分析～

はじめに、子どもの生活行動や意識等に関する主要な質問項目の回答に影響を与えている「心を捉える視点（因子）」を因子分析によって求めた。

分析に当たり、生活に関する行動の質問項目と意識に関する質問項目の両方を分析対象とし、「本人の意識に関するものや自分の意思に基づく行動により回答できるもの」のみを抽出した。そのため、保護者の関わりに関する項目など、本人の意思とは別の原因が回答結果に影響を与えている項目については因子分析からあらかじめ除外した。また、質問項目により回答の選択肢の幅に違いがあることから、すべての値を平均が「０」、標準偏差が「１」となるように標準化した値を分析に使用した。

因子分析は、統計処理ソフトウエア「SPSS Statistics Vr22」を用いて（以下同じ）、最尤法、プロマックス（斜交）回転により行った。因子数は５年前調査の研究成果を踏まえ、「６程度」と仮定して分析を進めた。

分析の過程で、それぞれの因子の影響(因子負荷量)の大きい質問項目がまとまり（Ⅲ－2、(1)を参照）、それらに共通する因子について、当センター研究調査部で検討を行った。

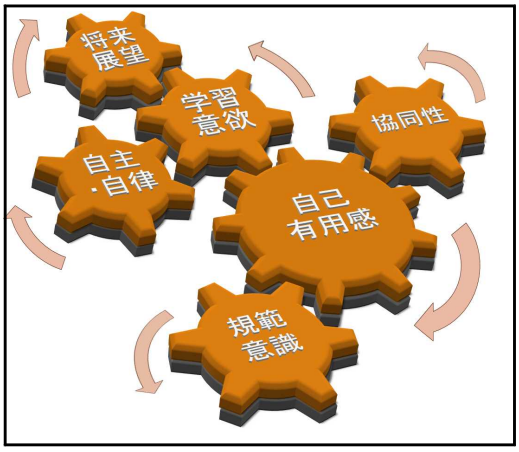


図２：心を捉える６つの視点

その結果、６つの因子を得た。第１因子には『自己有用感』、第２因子を『学習意欲』、第３因子を『自主・自律』、第４因子を『規範意識』、第５因子を『将来展望』、第６因子を『協同性』とそれぞれ名付け、これらを「心を捉える６つの視点」とした。

更に、因子同士の相関の強さを相関分析により求めた。**図２**は、因子の順序や因子間の相関の強さを考慮して、「心を捉える６つの視点」を模式的に図として示したものである。

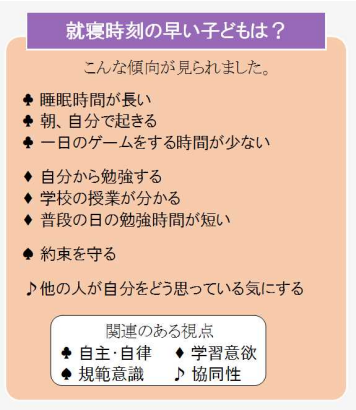
(2)　子どもの生活の基本とその他の生活行動との関連について　～階層的重回帰分析～

本調査研究では、子どもの生活のリズムをつくる上で基本となる生活の要素を「早寝」、「朝食」、「家庭学習」と捉え、他の質問項目との関連を調べた。

分析は、小５・中２・高２の回答結果を対象に、階層的重回帰分析（ステップワイズ法）を用いて行った。この分析方法は、多くの質問項目の中から対象とした質問項目（従属変数）と統計的に有意な因果関係がある項目を抽出することができる。その際、設定した別の項目の影響を取り除いた結果を得ることができるので、ここでは、「学年」と「性別」の影響を除くように設定して分析を進めた。なお、この分析の結果においては、項目間の因果関係を説明するのが難しいものもあるため、本調査研究では、この分析で得られた有意な結果の「因果関係がある」を、「関連がある」又は「傾向が見られた」という表現を用いることとしている。

表４は、「Ⅱ　調査結果の概要」で掲載する分析結果の一部である。『就寝時刻の早さ』と有意な関連があった項目を整理して示している。なお、ここで示している項目は、質問項目として実際に行った文章を省略して表現しており、以下も同様とした。

表４：子どもの傾向



(3)　６つの視点と保護者の関わりとの関連について　～階層的重回帰分析～

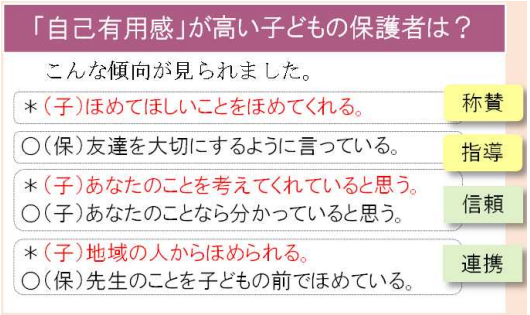
因子分析により求めた「子どもの心を捉える６つの視点」ごとに、関連のある保護者等の関わり方について調べた。

分析の前に、同じ因子に属した項目同士を合成して新たな変数を作成した（例：自己有用感８項目）。

分析は、階層的重回帰分析を用いて、その合成変数と保護者等の関わりの項目との関連を、「学年」と「性別」の影響を除くようにして調べた。

表５は、「Ⅱ　調査結果の概要」で掲載する分析結果の一部である。『子どもの「自己有用感」の高さ』と有意な関連があった保護者の関わり方の項目を整理して示している。

表５：保護者の傾向



(4)　子どもや保護者の傾向の確認について　～相関分析・クロス集計～

質問項目同士の相関分析を行い、項目間の相関の強さを調べた。その結果の例として相関係数表の一部を**表６**に示す。相関係数が高く、統計的に有意となったものの中から代表的なものを選び、クロス集計を行い、子ども及び保護者の傾向の確認を行った。なお、相関分析表については、ページサイズの関係で、本報告書への掲載やWeb公開はしない。

表６：相関分析表

小2 Pearson相関係数 **. 相関係数は 1% 水準で有意(両側) *. 相関係数は 5% 水準で有意(両側)	早い時刻に就寝する	睡眠時間が多い	朝すっきり目覚める	朝自分で起きる	朝食で品目を多く食べる	家の手伝いをする日が多い	テレビ視聴時間が少ない	本をたくさん読む	おはようなどのあいさつする	朝食を食べる	見てないところでもきまりを守る	時間を上手に使うよう心掛ける
(子)02早い時刻に就寝する	1	.484**	-.294**	.256**	.152**	.168**	-.216**	.148**	.169**	.174**	.126**	.137**
(子)03睡眠時間が多い	.484**	1	-.139**	.099*	.146**	.134**	-.083	.093*	.100*	.133**	.120**	.117**
(子)04朝すっきり目覚める	-.294**	-.139**	1	-.402**	-.064	-.113**	.111*	-.089*	-.137**	-.170**	-.134**	-.180**
(子)05朝自分で起きる	.256**	.099*	-.402**	1	.116**	.161**	-.160**	.130**	.094*	.016	.155**	.166**
(子)06朝食で品目を多く食べる	.152**	.146**	-.064	.116**	1	.194**	-.028	.155**	.258**	.307**	.100*	.162**
(子)08家の手伝いをする日が多い	.168**	.134**	-.113**	.161**	.194**	1	-.151**	.296**	.199**	.056	.124**	.183**
(子)09テレビ視聴時間が少ない	-.216**	-.083	.111*	-.160**	-.028	-.151**	1	-.006	-.053	-.036	-.093*	-.154**
(子)10本をたくさん読む	.148**	.093*	-.089*	.130**	.155**	.296**	-.006	1	.144**	.003	.094*	.187**
(子)11-①おはようなどのあいさつする	.169**	.100*	-.137**	.094*	.258**	.199**	-.053	.144**	1	.184**	.165**	.166**
(子)11-②朝食を食べる	.174**	.133**	-.170**	.016	.307**	.056	-.036	.003	.184**	1	.179**	.171**
(子)12-①見てないところでもきまりを守る	.126**	.120**	-.134**	.155**	.100*	.124**	-.093*	.094*	.165**	.179**	1	.333**
(子)12-⑤時間を上手に使うよう心掛ける	.137**	.117**	-.180**	.166**	.162**	.183**	-.154**	.187**	.166**	.171**	.333**	1